

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	佐々木知子
論文題目	戦争表現の社会学——演劇とラップにおける戦争非体験者の身体表現		
（論文内容の要旨） 本論文は、戦争を直接的に体験していない表現者による身体表現を通じて、戦争の記憶がいかにして〈いま・ここ〉に立ち上がるのか、すなわち、身体はいかにして戦争の記憶の生成に関与するのかという問いに答えることを目的とする。 本論文では、演劇作品『cocoon』と日本のラップ音楽を研究対象とする。両者を対象とした理由は、ひめゆり学徒隊を題材とした『cocoon』は、戦争を主題とする作品の中でも俳優の身体の使い方に対してきわめて自覚的な演出が施されており、戦争非体験者である俳優が、上演の中で戦争体験を想起し、身体を通してその記憶を立ち上げていく過程を分析することができる点にある。一方ラップ音楽は、貧困・差別・暴力などの社会問題をめぐる個々人の経験や感情を直接的な言葉で描いてきた特徴をもち、戦争という主題に対しても、個々の生活世界から語りうる可能性を開いている。加えて、ライブにおけるパフォーマーと観客の相互行為が活発であり、身体を媒介とした記憶の生成を検討するうえで適した事例である。 第1章では、本論文の問題設定と理論的枠組みを示した。戦争を過去の出来事として再現するのではなく、〈いま・ここ〉において身体的・相互行為的に想起される社会的プロセスとして捉える視座を提示し、体験者から非体験者への移行を踏まえつつ、集合的記憶論や文化的記憶論を参照して、記憶が社会的関係の中で生成される動的過程であることを理論的に位置づけた。 第2章では、演劇作品『cocoon』を事例に、戦争非体験者である俳優の身体が、上演において戦争体験をいかに表現しうるかを検討した。演出家・藤田貴大へのインタビューおよび公演映像の分析から、演劇では俳優の身体が舞台上に在り続けることで、観客が身体の消耗や声の変化に立ち会い、死の場面を身体的出来事として受け取ることが示された。上演は同一内容を再生するのではなく、毎回異なる条件のもとで成立する〈再演〉（representation）であり、リフレインの演出は「繰り返してはならない戦争」を「繰り返さざるをえない」ものとして提示する。さらに、現代の少女の身体が戦中の少女を演じることによって生じる距離やずれ、声の消失や身体のもろさは、戦争を感覚的かつ現在的に想起させる契機となっていた。 第3章では、『cocoon』を事例に、演劇表現を通して戦争体験の記憶がいかに生成されるかを検討した。演出家・藤田貴大のインタビュー、上演戯曲、公演映像、観劇ブログを資料とし、Halbwachsの集合的記憶論に基づいて分析を行った。その結果、沖縄戦の歴史が記憶の枠組みとして参照され、舞台上に戦争体験の集合的記憶が構築されているこ			

とが明らかとなった。フィクションや身体表現、リフレインといった演出技法を通じて、この集合的記憶は鑑賞者の個人的記憶へと変換される。現代的な少女の視点や俳優の身体表現は鑑賞者の共感と身体的共鳴を喚起し、想起とパラレルな構造を有するリフレインによって鑑賞者は、登場人物の想起を何度も擬似体験し、自らの個人的記憶へと変換することで戦争体験の集合的記憶を共有する。上のようなプロセスを経て、鑑賞者による、現在に位置づく新たな戦争体験の記憶の生成が行われていると考えられる。

第4章では、日本のラップ音楽における戦争表現の変遷を、歌詞分析を通じて検討した。2000年代前半には、9.11と対テロ戦争を背景に、戦争は日本から距離をもった「遠い現実」として描かれていたが、東日本大震災以降は、統制社会への不安や未来の戦争への懸念と結びつき、日常生活と連続する主題として表現されるようになった。その際、「レペゼン」や「サンプリング」といった技法を通じ、個々の生活世界と戦争が接続されていた。

第5章では、ヒップホップのライブを事例に、戦争という語りにくい主題が、パフォーマーと観客の相互行為を通じていかに成立するかを分析した。THA BLUE HERB

「REQUIEM」のライブ分析から、演奏前のMCが最低限の共同性を形成し、演奏中は沈黙や身体の揺れを基調とした参与が選択されることで、「鎮魂」と「娯楽」という異なる次元が同時に成立していることを明らかにした。

第6章では、非体験者である表現者が、戦争表現をめぐる社会的規範との関係のなかで、いかに自己の立場を構築しているかを検討した。演劇では、上演を重ねる中で蓄積される身体経験が、非体験者でありながら戦争を語る基盤となっていた。一方ラップでは、文化に内在する規範を参照しつつ、多義的な解釈を許容する表現が構想されていた。

第7章では、以上の知見を踏まえ、非体験者による戦争表現を、身体的・相互行為的実践を通じて記憶を現在に生成し続ける営みとして位置づけ、その社会学的意義を総括した。非体験者による戦争表現は、過去の再現ではなく、身体的・相互行為的実践を通じて記憶を再生成し、戦争を現在の社会的関係のなかに生かし続ける営みであることを明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、戦争を直接に体験していない表現者による身体表現を通じて、戦争の記憶がいかにして〈いま・ここ〉に立ち上がるのか、身体はいかにして戦争の記憶の生成に関与するのかという問いに答えるため、日本の演劇とラップ音楽という2つの表現領域を対象に、戦争非体験者の身体表現のあり方を解明したものである。

戦後日本においては、文学・映画・マンガ・アニメ等さまざまなメディアによって戦争の記憶が表現され、それらは戦争体験を語り継ぐ装置として機能してきた。しかし、戦争表現を「過去の再現」や「記憶の継承」としてのみ位置づける限り、その受容者は受動的な観察者の立場にとどまり、戦争は常に、他者の体験や過去の出来事として受容される。また、それらの戦争表現の多くは、「体験者から非体験者へ」という伝達構造のもとで成立し、戦争を直接経験した当事者が伝達の主体として正当性を付与されてきた。しかし、戦後80年を経て、戦争体験者は少数となり、従来の伝達構造を維持することは困難になりつつある。戦争表現をめぐるこうした状況は、多くの先行研究によって明らかにされてきた。

本論文は、現代の戦争表現がおかれたこうした状況を踏まえ、戦争体験の正当性を有する当事者ではなく非当事者である表現者が、経験の継承ではなく〈いま・ここ〉に生成される身体的経験として、戦争を表現する可能性を追究している。そのために、演劇の俳優やラッパーといった非体験者の身体が、上演やライブという出来事のなかで、いかに戦争を感じ、語り、想起を生成しうるのかが実証的に論じられている。本論文の最大の意義は、そのことによって、現在の日本社会において、記憶の継承にとどまらない新たな戦争表現の可能性を明らかにした点にある。

さらに上記の点に加えて、下記3点も、本論文のオリジナリティとして評価すべきものである。

第1点は、演劇においてもラップにおいても、観客・聴衆を単なる受動的な受容者としてではなく、舞台上の俳優やラッパーの身体と相互作用することにより、戦争についての新たな記憶を生成しうる主体として位置づけている点である。このことにより、上述のように従来の戦争表現の前提であった、表現者と受容者、体験者と非体験者との非対称性が相対化され、表現者と観客・聴衆との双方向的なコミュニケーションから、戦争をめぐる想起が生成される可能性が示されている。

第2点は、演劇における〈再演〉(representation)とラップにおける〈レペゼン〉(represent)が、共通の構造をもつ表現実践として捉えられることを示した点である。〈再演〉とは、俳優がその身体を通して出来事や経験を〈いま・ここ〉に立ち上げる実践であり、〈レペゼン〉とは、ラッパーが自らの立場や生活を提示することで、その社会的な位置づけを再構築する実践である。戦争を主題とするラップにおい

ては、〈レペゼン〉はラッパー自身の生活や世代と戦争との連続性を表現する。両概念が共通の語源をもつことは偶然ではなく、過去を忠実に再現することよりも、現在の身体を媒介として新たな記憶を生成する点において、共通した意味構造をもっている。この点は、演劇とラップという異なる表現領域が、上述のような新たな戦争表現の可能性を共に有することの必然性を示唆している。

第3点は、本論文の理論的枠組みである集合的記憶論への理論的貢献である。J.アスマンは、集合的記憶を、対話や伝承によって世代間で維持されるコミュニケーション的記憶と、芸術や記念行事など制度化された文化的形式によって長期的に保持される文化的記憶との2層に区分した。この枠組みによれば、戦争体験世代の減少により、戦争体験のコミュニケーション的記憶の維持はしだいに困難になり、それは、後続世代によって映画や文学といった形式によって再構成された文化的記憶に取って代わられていくことになる。しかしながら本論文は、演劇やラップのライブにおいて、文化的記憶とコミュニケーション的記憶が身体表現を介して相互に往還し、記憶が更新されていく様相を明らかにした。すなわち、文化的記憶とコミュニケーション的記憶とが再循環するプロセスを見出した点が重要である。

以上のように多くの長所が見いだされる一方で、本論文には、その裏面として、いくつかの限界や未解決の課題も存在する。

その第1点は、受容者による想起の生成が、そもそもいかなる想起の形式によって可能になるのか、必ずしも厳密に理論的・実証的には示されていない点である。この点は、本論文で用いられた鑑賞者のブログというデータの限界にもよるが、今後は、より幅広いデータに基づく分析が必要になると思われる。

第2点は、戦争非体験者による新たな記憶の生成が、歴史修正主義的な記憶の再構成に動員される可能性はないのかが、必ずしも明確ではない点である。この点に関しては、戦争体験の記憶がいかにして固定化され、あるいは固定化を免れうるのかを、今後より批判的に検討していく必要がある。

以上のように、本論文には若干の課題が存在するものの、これらの課題への取り組みは、むしろ学位申請者の今後の研究の発展に期すべきものであり、先述した、本論文の有する高い専門的・独創的価値そのものを減じるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和8年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降